

## 9-5 先輩上司は頼れない！ 問題は自ら解決

### 1. 立場と仕事

建設コンサルタントに入社して主に橋梁下部工や擁壁・函渠の計画・設計業務に従事し、3年が経過していた。それまでは先輩の指導・監督の下で業務を遂行していたが、実力がついてきたこともあり、橋梁下部工の詳細構造設計業務の担当者として、先輩とは組まず、初めて自分主導で業務に取り組むという立場となった。

### 2. 遭遇した事態

当該設計の協議相手としては、発注者の他に関係機関がAとBの2者あった。このため、計「3者」からの指示に対応する必要があったが、関係機関Aの担当者は自らの主張を押し通す傾向が強い人物であった。

発注者の担当者は、橋梁工事に関しては専門外だったため、自分は構造設計に関連する折衝等を担当していた。しかしながら、協議における折衝の中で、自らの経験不足等で即答できない状態が続いたこともあり、発注者と関係機関Aが険悪な仲となってしまう、関係機関Aの担当者が橋梁下部工設計に対して様々な問題点を列挙して協議の議題として取り上げはじめた。協議は毎週実施しており、多いときは週3回の場合もあった。

膨大な作業遂行と過度なストレスに耐える日々が続いたため、先輩や上司に業務に参画するよう何度もお願いしたが、他業務で手一杯との理由で断られてしまい、全て自分ひとりで対応せざるを得ない状況に陥ってしまった。

### 3. 対応内容とその結果

先輩や上司が加わって体制を立て直して対応するというマネジメントがベストであることは明白であったが、現実として実行不可能であったため、別の方法でこの難局を乗り越えることを考えた。具体的には、関係機関Aの担当者からの厳しい技術的質疑に対して、自分自身が全体的確に即答できるようになるための知識・見識を身に付ける事を目標にして、設計業務のほかに毎晩深夜まで膨大な量の設計指針類や技術資料を何度も読み込んで隅から隅まで理解しつくした。業務履行中の短期間でこの目標を達成するために、睡眠時間も土日・休暇もすべて削って、忍耐に忍耐を重ねて、このような生活を半年ほど続けた。

その結果、客観的に見ても極めて速いスピードで技術力が飛躍的に向上した。関係機関Aの担当者との協議もスムーズに行うことができるようになり、発注者の担当者も自分の努力と能力を認めて信頼してくれるようになった。また、発注者の担当者は最終的には、施工段階での現場への指示内容や会計検査についても、自分を名指しで頼ってきてくれるようになった。その後も発注者の担当者が定年退職する年まで、交流が続いた。